



①(資料番号26 重要文化財 短刀 銘来国光 廣八幡宮蔵)

令和4年 9月 22日	
資料提供	
担当課	和歌山県立博物館 学芸課
担当者	学芸課長 前田正明
電話番号	073-436-8684

梧陵と故郷・広村周辺の文化財を紹介

特別展「濱口梧陵と廣八幡宮」の開催について

この特別展では、津波から逃げ遅れた村人を高台の廣八幡宮ひろはちまんぐうに導いて、多くの命を救った「稲むらの火」の話で有名な濱口梧陵はまぐち くりょう(1820～85)ゆかりの資料を紹介するとともに、幾度の地震津波に遭遇しながら、今日まで守り続けられてきた、梧陵の故郷である広村(有田郡広川町広)周辺に所在する廣八幡宮・明王院みょうおういんをはじめ、法蔵寺ほうぞうじ・養源寺ようげんじ・安楽寺あんらくじの文化財を紹介します。

会期 令和4年10月15日(土)～11月23日(水・祝) 展示日数34日
 会場 和歌山県立博物館 常設展示室・企画展示室
 開館時間 9時30分～17時 (入館は16時30分まで)
 入館料 一般830円(680円)、大学生520円(410円)
 ()内は20人以上の団体料金
 高校生以下、65歳以上、障害者、県内に在学中の外国人留学生は無料
 ふるさと誕生日(11月22日(火))は無料
 休館日 月曜日

【展示構成】Ⅰ 廣八幡宮と明王院 Ⅱ 法蔵寺と一空上人 Ⅲ 養源寺と日寛上人
 Ⅳ 安楽寺と集う人々 Ⅴ 濱口梧陵と安政地震津波

展示資料総数 176件312点

(うち重文1件1点、重文(附)4件28点、和歌山県指定3件5点、和歌山県指定(附)1件2点
 広川町指定4件23点)

関連企画 (詳細はチラシをご覧ください)

①博物館講座 10月23日(日)、10月29日(土)、11月6日(日)
 13時30分～15時 近代美術館2階ホール

②ミュージアムトーク (展示解説)

10月15日(土)、11月12日(土)、11月20日(日)

13時30分から1時間程度 博物館1階展示室

新型コロナウイルス感染症流行の状況により、中止になる場合があります。

[添付資料]チラシ、展示のみどころ、出陳資料目録)

画像データは、下記のアドレスにご連絡いただければ送付いたします。

admin@hakubutu.wakayama-c.ed.jp(博物館メールアドレス)

担当者 県立博物館学芸課 学芸課長 前田正明
 〒640-8137 和歌山市吹上1-4-14
 (TEL 073-436-8684 FAX 073-423-2467)



【特別展「濱口梧陵と廣八幡宮」 展示のみどころ】

- ① ^{すはら} 栖原(湯浅町)の有力者が、廣八幡宮に鑑定書をつけて短刀を奉納しました。(画像は表紙にあります)

鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて、^{やましらのくに}山城国(京都府)の刀工・^{らいくにみつ}来国光が制作した刀です。^{ほんあ みこうちゆう}本阿弥光忠による、貞享2年(1685)の折紙(鑑定書)が付けられています。刀を収納する箱には、^{すはら}宝暦7年(1757)3月に^{すはら}栖原(湯浅町)の^{たんとう めいらいくにみつ}北村半平が八幡宮に奉納したことが記されています。(資料番号26 重要文化財 短刀 銘来国光 廣八幡宮蔵)

- ② 江戸時代以前の廣八幡宮の歴史を語る数少ない仏像です。



現在は^{みょうおういん}明王院(広川町上中野)の^{ごまじろう}護摩堂の本尊で、江戸時代は廣八幡宮境内の観音堂に安置されていたようです。太く張りのある^{たいく めんぼう}頭部や体軀、^{たいない ほけきょう}面貌表現は鎌倉時代後期から南北朝時代の作風を示しています。胎内に^{たいない ほけきょう}法華経を写した^{じょうへん}経巻6巻が納められていました。経巻の末尾に、^{じょうへん}元徳元年(1329)10月20日に^{じょうへん}僧乗遍が^{じょうへん}仙光寺本尊の中にこの経巻を納めたと記されていたことから、仙光寺に安置するため元徳元年に制作された仏像であることが判明しました。仙光寺は廣八幡宮の別当寺とされていますが、その存在はよくわかっていません。すでに江戸時代には仙光寺はなく、^{たっちゆう}仙光寺の塔頭であった^{たっちゆう}明王院と^{たっちゆう}薬師院だけが、廣八幡宮に隣接して建っていました。

(資料番号33 十一面観音立像及び胎内納入経 明王院蔵)

- ③ 廣八幡宮の近くの^{とうきば}陶器場で焼かれた^{こまいぬ}磁器製の^{こまいぬ}狛犬が、^{こまいぬ}神様を守っていました。



廣八幡宮の境内地である^{おとこやま とうきば}男山の陶器場で焼かれた狛犬です。この陶器場は、紀伊藩から資金的援助を受けた^{おとこやま とうきば}崎山利兵衛によって開かれ、ここで焼かれた^{おとこやま とうきば}やきものは「^{なんき おとこやまやき}南紀男山焼」といわれました。狛犬の体は黄、たてがみや尾などの毛^{まきげもん}や巻毛文は緑、口の周囲や眼球は紫、歯や白目は白の^{ゆうやく}釉薬が施されています。頭部、^{うしろあし}後脚、尾などは別につくられ、素焼きの後に胴とつなぎ合わされたとみられます。南紀男山焼を代表する^{こうせんでいせんば}陶工・^{こうせんでいせんば}光川亭仙馬が関与していたと考えられます。南紀男山焼のやきものとしては最大級の大きさです。

(資料番号52 和歌山県指定文化財 南紀男山焼 三彩狛犬 廣八幡宮蔵)

- ④ 濱口梧陵の子孫が、和歌山ゆかりの画家に依頼した梧陵の肖像画



^{つが}津荷村(串本町)出身の画家・^{はまじせいまつ}浜地清松(1885~1947)が描いた^{はまじせいまつ}濱口梧陵(1820~85)の肖像画です。ナイアガラの瀑布を見る^{はまじせいまつ}濱口梧陵の^{はまじせいまつ}写真をもとに制作されたとみられます。浜地は明治34年(1901)に移民として渡米した後に美術を志し、ニューヨークを中心に活動しました。昭和2年(1927)にはパリに渡り、翌年帰国しています。その後、東京にアトリエを構えました。浜地は東京の和歌山県人会「不老会」などにも参加し、ヤマサ醤油を経営する^{はまじせいまつ}濱口家とも交流をもつようになり、^{はまじせいまつ}濱口家からの依頼で制作されたとみられます。

(資料番号148 濱口梧陵とナイアガラの瀑布 浜地清松筆 稲むらの火の館蔵)